

本誌第39号につづくもので殊さらに前置きの必要もあるまい。本号は七月から十二月までを紹介し、今回をもって屋久島の年中行事関係を終ることとする。

文献資料 紹介

《第40回》

【年中行事関係綴】

やまもとひでお
山本秀雄

七月から十二月の行事

七月一日 ウツタチの日

○ 御先祖の精霊様しんりょうさまがお盆に帰るため、あの世（御岳）をお立ちになる日だという。各家人は身を慎んだ。またお着きになる日は十三日。十六日の朝はお発ちの日というが、御岳に帰り着かれる日は八月一日といい、前半を迎え火、後半を送り火と言うて一ヶ月間提灯を点しつづけた。これは精霊様の足元を照らしてゆききの無事を願うてのことというが、村によりお着日、お立日に違いがある。また村によっては子供たちが一定の場所で迎え火・送り火を焚いたというが、今は防災上各家庭前で松や杉の芯部分をけずって申訳ほどに迎え火をたいている。

七月七日 セツク、タナバタ（七夕様）

○ 子供のある家では短冊をカラ竹に下げる。五色の色紙を短冊に、また女の子は着物型に切つて、それぞれ願い事を書いて吊す。昔は里芋の葉の露を早朝にとつて硯にすり、筆書きした。内藤喬氏「学術調査報告」続編（昭和二十八年）に、「秋風吹きにし日より天の河原に立たぬ日はなし」、の句もあるから伝承の文句があった

ものか。なおこの日の夕方、各村墓地掃除を行う。

七月十二日 精霊迎え（最近ほとんど十三日に行う）

○ 特に初盆の家ではお寺にお詣りをする。むかし宮之浦ではカタピラ衣装を着てお寺に参ったという。

七月十三日 精霊迎え

○ 近年、各集落の共同墓地化、納骨堂方式が進み、子供が一緒に迎え火をすることは見られなくなったが、法華宗の初盆の家ではカタピラの衣装を着てお寺に参り、墓前と家の前で麻穀（松か杉の芯、またはササゲのサヤで迎火をたいた）という。

○ むかしむかし、といつても太平洋戦争に入る頃までは、午後の四時頃から青年たちがセガキと言う太鼓踊りを行い（宮之浦）、また婦人たちのナギナタ踊りも（尾之間）、手踊りなども行われたというが、今はかかる郷土色豊かな精霊迎え行事はまったく失われている。が各家で角マキまきやカカラン団子、餅菓子をつくり親戚縁者に配ることは続いている。

○ なお十三日といえば安房でこの日の午後三時頃から、「如竹踊り」が行われたという。掖玖聖人やくくといわれた泊如竹翁を偲んで行われた。十九歳から四十一歳までの男子だけで踊るものであった。今は精霊迎えに如竹踊りが行われることはない。

は各寺院の内々の行事となっている。

- 金祝いⅡ一文銭など穴開銭を紐につないで親戚縁者を招いて拝ませるお祝いをすること。本来は別な意味があったのではないだろうか刀剣・鉄砲武器を拝観する等今は定かではない。

- 硯祝いⅡお師匠さん、先生方を招いてお祝いをした。

- ケズリカケⅡ神事で柳・イヌタブの木の皮を剥いて削りかけにして門口に立て邪気を払い服を招くまじない。神社や神棚にも五、六寸の親指大の大きさのタブの木に縄目、綾地に焼きしるしをしたケズリカケを供えて豊作を祈願する主に豊作祝いであった。

八十センチ〜一メートルの大きなケズリカケを作って土や果樹を叩き、又蚕や繭の無害生育を願った。盛沢山な行事のため元日に準じた小正月として新たに餅をつき、赤飯を炊いて田畑、農具にもお供えをした。今、これらの農作行事は島の南側に見られ、これは気象条件によったものであろう。桑の木の豊富な島には稚蚕飼育場も多くあり、全国に蟻児ありごが送られていたが、化学繊維の発達によって天蚕は姿を消し蚕祝い行事は失われたが、小枝の多いエゴノ木の枝先に小餅をさして大黒柱や神棚に供える事は伝承されている。小餅は繭に擬したものである。

正月十四日

- 小正月Ⅱ正月に準じたお備えをする。農作祭り、蚕祭り（蚕舞という歌舞も行われたが現在は行われぬ）、お餅をつき田、畑、農機具にお供えする。

正月十五日

- 十四日の行事を十五日に行う所もある。昔正月に御三日ごさんじつといつて一日、十五日、二十八日に赤飯を炊いて神社に供え、家中清める儀式があったというが、二十五日正月までの間の行事が混同して本来の姿がわからない。

農具祭りあり、ケズリカケあり、厄払いあり、生り物（果樹木）攻めあり、ジンドーの節句あり、桑団子まきの日（子供の遊びの日）あり、又ヨメ女出せといひ、この日子供たちは嫁女を追いかけて墨を塗った。

- 今日では成人式という祝日Ⅱ成人式は昭和二十四年が最初である。

- 十五日Ⅱ蓬萊をしき、お粥を炊く。

川上の清浄な水をお椀に汲み、小石を三個入れて持ち帰り、竹柴で水を撒き家中を浄めた。又箕の中に米一升を入れた。柳の枝三十センチ位、先を四つ割にし、カヤ七本を根抜きにして箕の中に飾った。その時子供達が唱える詞は、「あら玉の、年の初めに蓬萊しいて、波打ち見れば伊勢が浜、潮より先に、とんといり込む十二方の作り物、穂に穂がいのないように、芋ん子はゴロゴロ、栗ん子はブラブラ」

普通は子供達が行うが大人に代わることもある。

- ホダレヒキⅡ蓬萊をしくと同

気がつけば、
あなたも自然の一部。
肌で知る、
「自然島」のエコツアー。



エコジカルスポット
自然島

「自然」と触れ合う為のグッズ等を取り揃え、大自然との付き合い方を提案しています。
どうぞお立ち寄りください。

エコツアーのご相談は
お気軽にどうぞ。

(有)自然島

TEL&Fax 09974-7-2364

〒891-44 鹿児島県熊毛郡屋久町麦生313-63

八月十五日 綱引き その日青年達の手で三つよりの大綱をつくる。

○ 綱の芯は葛のカズラを使用し、さらにマガヤを間に入れて、直径十五、六センチの大綱をつくり、村の中心の広場に輪に積み上げ、月にお供えする。月の出と共に村役人たちによる清めのお祓い儀式（神主さんによる）を斉行したのち、祝詞ならぬ綱引歌を代表者が唄ってから、輪にした綱を大通りの曳き場に移動する。綱引きは大体集落を上下に、または東西に二分して、三回勝負、位置を替えて行う。終つて綱を砂場に土俵として子供相撲が行われる。（古式を守る中間の清メ祓い式に、十五夜綱ひき歌の一番が祝詞として唄われる。

「十五夜のお月さま、山の端にかかるか、かからぬか、かかればかかる……」云々と。

本番の綱引きは最初から最後まで唄い手の音頭にまかされる。唄は主に「お久米口説」、「鈴木主人口説」などの口説唄で、歌手は四、五人が交互で唄う。唄の数は二、三百にも及び、時間も相撲まで入れると月が中天に達する十一時、十二時にもなる由。唄い手の居ない集落は他村から頼んで唄って貰う。

八月十五日 正八幡祭（惣八幡）

○ 麦生の祭りですウマワリという。頭屋が順番に祭りの世話をした。新酒（芋焼酎）を奉納する祭りであったと言うから、本来は旧八月の行事であったのか。

八月十六日 タケマイリ

○ 小瀬田はこの日、前岳にある愛子岳（霰岳）に日帰りの参拝。小島もこの日にタケマイリをする。

八月二十五日

○ 小瀬田でこの日、権現様祭りという山ノ神の祭りがあった。

九月一日 タケマイリ

○ 尾之間も麦生同様にお籠りのタケマイリをする。

栗生も三日間かけたお籠りの登山をした。一泊は前岳、二泊目は奥岳にお籠りをして、三日目に帰るものである。奥岳行きは青年たち、子供組は七五岳（前岳）に、帰りを同時刻に定めておき、村の入口でサカムカへの御馳走を受ける仕来たりになっていた。

○ 宮之浦もまたこの日に前岳（羽神山）、奥岳（宮之浦岳）に参拝（お籠り）して二日目に下山した。サカムカへは栗生と同様であるが、登山者は選ばれた八名に限られ、出発からサカムカへまで益救神社神官が執り行なう一定の作法に従い、登山の前夜も拝殿にこもり、翌早朝海水でみそぎして出発した。持参するものは御洗米、酒、白砂、しへい（海水をしたした海藻、（ホンダワラ）を青竹の筒に入れる、それに賽銭などであった。

九月九日 節句（ヨリゼックともホゼノセックともいう）

○ 菊の節句のことであるが、とに角この日はご馳走を一杯つくり、神様・仏様にお供えする他、家内中、村中 適当な場所に集まって腹一杯食べる日である。お客があればお酒も出す。ホゼノセックは穂の節句で豊作を意味し、この日食べないと年中ひもじい思いをするといつて、腹がさけるほど食べた。

「屋久島記」という古い資料（本誌第3号参照）にも紹介、歌舞伎狂言を取りむすぶ栗屋をしつらえて……と、村芝居の行われた記事があるから、農閑期開放された明るい島の芸能の豊かだった

『生命の島』次号は

3月15日発売の予定です。

たことが窺い知られる。

九月十三日 アトノツナヒキ

○ 旧九月十三夜綱引、八月十五夜と同様である。

尾之間、麦生、小瀬田などで近年まで旧習を守って来たが、現在は行われていない。

九月十六日 山の供養

○ 各集落、山林に関係する業者や営林署の方々の木魂を慰めるお祭りで、事業所近くに祀られた山神の前でそれぞれ木の供養をする。山の神祭りは一月、五月にも行うが、これを林業者の平安息災祈願とすれば、九月はその願が成就した事に対する喜びの感謝祭で、山に関係の深かった屋久島にとって大変に盛大で大事な行事として継承されている。

○ また漁業者の海供養も、この日盛大に行われた。船団火子、関係者が船主のもとに集まって大供養をする。昔は鰹一万匹を万の供養、飛魚漁獲五万に対して五万の供養、十万に十万供養と称して行われた。海と山の供養が同日にあるは大変に珍しく興味のあることといわれているが、今日は鰹、飛魚の水揚げも少なく、海の供養も満足に行われない。消滅の方向にあるのか？

○ またこの日は各地に産土産祭がある。ウブスナ祭は本来氏族のご先祖を祭るものだが、屋久島では多少趣を異にする。それはウブスナ祭を権現祭とも言うからで、元々御岳に奉祀されている一品法寿大権現（即ち山の神）で、これが益救神社から分請されて各集落にも祀られていた。ところが、排仏毀釈、信教の自由化によつて、各村が益救神社を離れて、職業神とか独自の祭神を祀る時代になり、古来神の他、山の神、海の神、農業の神と、諸神が崇拝される。更には移住者の氏神も加わって、それぞれに式日を昔日と同じにしたことで、十六日のウブスナ祭が多いのであろうか。

九月十九日～二十二日

○ この間は各自各家毎に、又は山の仕事仲間同志、舟子・網子同志が、十六日の山供養・海供養の延長で、思い思いに順番にまわつてご馳走をしあうが、料理の材料から酒まで割勘であつたという。盛んだつたのは明治末までで今日は消滅している。

九月二十三日（旧）

○ 二十三夜待、一月・五月と同様（本誌38号74ページ参照）、楠川、麦生、小瀬田で行われている。

九月二十三日

○ ヒガン、山祭りする集落もある。宮之浦ではこの日、宮之浦岳、太忠岳、明星岳、中島権現岳、前岳（羽神）、モヨイ岳に参詣した。

九月二十四日

○ ホマツリ——サクマツリともいって、麦生では岳の神に稲穂をお供えして感謝の岳参りをした。勿論、弓矢八幡様をはじめ、土地のすべての神々にお供えをする。

○ 宮之浦でも旧二十一日、新米を奉納するため宮之浦岳に青年の代表者を登山させた。豊作感謝のためのお籠りが習して、三日にわたり、二十三日に戻った。青年が山に籠る日、残りの青年たちは村の神社にお籠りした。サカムカへは前例の通り。

九月三十日 神のお立ち日

○ 十月は神々が留守になるということで、九月のみそか、願立、願ほどきを済ませた。三十日は神社参拝が多かつた。

十月一日

○ 小瀬田ではこの日を神のお立ち日に行っている。

○ 亥の日の祝い 各自餅をついて神様に供える。（なぜ十二支の最後を祝うかわからない）

○ オコー祭り 日蓮上人の祭り日。法華宗の家では餅をついてお寺にあげる。真宗は関係しない。

十月十六日

○ カミサマノルスゴト。宮之浦、小瀬田では神様の留守事といって、弁当を作って神社に参拝し、そこで食べた。

○ 十月山 山師は十月山をきらって、大木は切らなかつた。殊に山に寝泊りすることをほとんどしなかつた。十月山に行くと、よく笛や太鼓の音を聞いた。

十月二十五日

○ 楠川天満宮秋祭 舞台をしつらい芸能祭を行なう(盛大)。

十一月一日 マチムケマツリ

○ 出雲から神様の戻る日とて、神社で出迎えをしてお酒をいただく。麦生ではお寺で、小瀬田では神社でマチムカへをする。世話役は五人、時に十人が出ることもあつた。

十一月七日〜十三日

○ 日蓮上人御会式(法華宗最大の法会)。

十一月十日〜二十八日

○ 真宗報恩講(各地真宗のお寺で)

十一月十五日

○ 麦生弓矢八幡祭

十一月二十四日(益救神社古式では十一月二十四日。現在は四月十日)

○ 益救神社ヤクシマ祭といって、二十三日は月待ちをして夜を明かし、二十四日に盛大な芝居狂言が行われた。今はない。

○ また麦生でも権現祭があり前岳に参詣した。

○ 小瀬田では愛子岳に参詣した。

○ 栗生神社の秋祭りは十一月二十三日。

十二月

十二月にはきまつた行事はなかつた。正月準備としてススハライ、昔はタキギ取りを行った。

○ 正月に焚くタキギを十月中に里山に伐り、これを十二月中に玉

切つて運ぶのである。一戸当り正月用は一ハエ(長さ五尺高さ六尺)であつたという。伐る日は山の口あけと言って、村ごと定まつた日に行つた。

十二月二十八日

○ 門松迎え 松の小枝、椎のヒコバエ(小枝)・ユヅリハ・ウラジロ(シダ)を山から迎えて来る。椎の小枝に代えてコサン竹を用いたりするが、現在は出来合いの仕入品が流行して古風は失われつつある。

十二月二十九日

○ 門松飾り(門松立て) 古風は土地のワラ造り注連繩しめなわに橙・ユヅリ葉・木炭、最中にウラジロをつけて、椎の木やコサン竹に小松の枝をつけて割木で束ね、門の門木にゆわえるが、かかる素朴なものは影をひそめつつある。代わつて、大竹をハス切りにした三本を束ねて砂を入れた苫に立てる仕入品が幅を利かせる時代になつた。かくて島の正月も徐々に都会風になつてゆく。

あとがき

年中行事について調べながら、ふと気づいたことは(勿論集落すべてに足を運んだ訳ではないが)、島の南部(屋久町)は森・作物・水とといった自然の匂いのする行事が残るに對し、北部の上屋久町は多様な生活、観光型職種が広がり、曆通りの日時に行事参加は不可能になりつつある。従つて古風の伝統文化も失われる運命となる。特にそれを支える若者の流出が一番大きな原因になつているが、不思議と農林漁業が旧曆に密着するところに多く伝統行事が守られていることも知られた。

今は姿を消しつつあつても、資料がいつか復活へのしるべとなると願つて。